

特別支援学校の教育実習における 学生の意識について (4)

— 実習生の意識の変化について —

今 野 邦 彦¹ 原 田 公 人² 矢 野 潤³

Student Attitudes Toward Teaching Practice at Special-needs Schools (4)

— Changes in student teacher attitudes —

Kunihiko KONNO¹, Kimihito HARADA², Jun YANO³

Abstract

In 2001, the Department of Early Childhood Care and Education of the Faculty of Human Life Sciences at Fuji Women's University initiated teacher training programs geared toward helping students obtain "Class 1 special-needs teacher certification." Since 2009, the Faculty has focused on clarifying the attitudes of students toward teaching practice as well as their opinions on and demands for schools where they have practiced teaching, supervisors and our university by conducting annual questionnaire surveys filled in by students who have completed their teaching practice at special-needs schools.

Based on the results of a survey conducted over a four-year period from 2014 to 2017 using a revised version with new survey and question items, we have attempted to specifically identify changes in student attitudes toward teaching practice at special-needs schools.

These survey results revealed that efforts made to improve instructions provided to students preceding their actual teaching practice have been conducive to enhancing their expectations for teaching practice, alleviating their worries about teaching practice and lessening their confusion when preparing teaching plans and presenting demonstration classes. They also indicate that volunteer activities at special-needs schools and classes conducted prior to actual teaching practice are instrumental in developing their self-confidence.

所属：

¹ 藤女子大学人間生活学部保育学科

² 藤女子大学人間生活学部保育学科

³ 藤女子大学人間生活学部保育学科非常勤講師

Department of Early Childhood Care and Education, Faculty of Human Life Sciences, Fuji Women's University

1 はじめに

藤女子大学人間生活学部保育学科（以下、本学科とする）では、2001 年から特別支援学校教諭一種免許状の取得に向けた特別支援学校での教育実習を開始した。

現在、保育所・幼稚園・認定こども園には、さまざまな障害のある子ども在籍しているが、本学科では、障害のある子どもたちそれぞれの存在を尊重し、主体性を育むための関わり方や、子どもの障害の実態について学べるさまざまな科目が開講され、特別支援教育について学ぶことができる。このような本学科の特性を背景として、保育士・幼稚園教諭・保育教諭を目指す学生のうち、毎年希望者が特別支援学校教諭免許状を取得している。図 1 は、2001 年度から 2017 年度までに本学科で特別支援学校教諭一種免許状を取得した者の数である。17 年間で計 728 名が免許を取得している。

この間、2009 年からは、特別支援学校での教育実習を履修した学生を対象に質問紙調査を毎年継続して実施し、教育実習に対する学生の意識、実習校・大学に対する意見・要望等を明らかにしてきた。またこれと並行して、2011 年度からは、本学科の学生が教育実習を行った特別支援学校の実習指導担当教員に対しアンケート調査を実施し、特別支援学校の実習担当教員の教育実習における充実感とその内容、また実習指導教員が行っている指導内容や大学での事前指導に対する期待、教育実習に対する考えについて分析を行ってきた（池田・小川・武石；2012、2013、今野・池田・小川；2016、2018）。

学生の意識調査の結果は、池田・小川・武石（2011、2013）、今野・池田・小川（2017）としてまとめられ、多くの学生が不安と期待を感じながら実習に臨んでいるが実習後には満足を感じていること、また、事前指導で必要となる内容や、ボランティア体験の必要性についても示唆された。これを受けて本学科では、教育実習事前指導の内容の改善、教育実習の充実に向けた体制整備の検討をしてきた。

2 目的

質問紙の調査項目・質問内容を改編した 2014 年から、2017 年までの 4 年間の調査結果に基づき、

特別支援教育実習を履修した学生の意識の変化について考察し、本学科の特別支援教育実習指導の成果と今後の課題を明らかにすることを目的とする。

3 方法

本学科で、2014 年度から 2017 年度までの 4 年間に特別支援学校での教育実習を履修した学生（2014 年度 64 名、2015 年度 54 名、2016 年度 50 名、2017 年度 35 名、計 203 名）に対し、アンケート調査を実施した。

調査項目は、2013 年度まで行っていた調査から新たに項目を整理し見直したものである。実習前には、「実習への期待、不安、教育実習における努力目標」について質問し（資料 1）、実習後には、「実習中に楽しかったこと・辛かったこと、実習の満足度、自己の成長、実習前のボランティア、大学への要望、後輩に伝えたいこと」について調査した（資料 2）。

回答にあたっては多肢選択法と自由記述法を併用した。多肢選択法では、該当する 3 項目以内を選択する方法を採り、実人数に対する回答の割合を求めた。さらに自由記述の回答を参照することにより、学生の意識の詳細を検討した。また経年推移の比較から、本学科での特別支援教育実習指導の取り組みに対する分析を試みた。調査では全 203 名から回答があった。

4 結果

(1) 実習前調査

①実習への期待度

実習前に、実習への期待度を質問した結果が図 2 である。4 年間の平均値は、「かなり期待がある」19.2%、「少し期待がある」62.0%であり、8 割以上の学生が特別支援教育実習に期待感を持っていることがわかる。ただし、経年変化を見ると、「かなり期待がある」は低下傾向にあることがわかる。また、「ほとんど期待がない」「あまり期待がない」が、少人数ながら増加傾向にある。

②期待の主たる内容

「かなり期待がある」「少し期待がある」と答えた学生に対し、期待する理由・内容を複数回答で尋ねた結果が図 3 である。平均値が高い順に「新

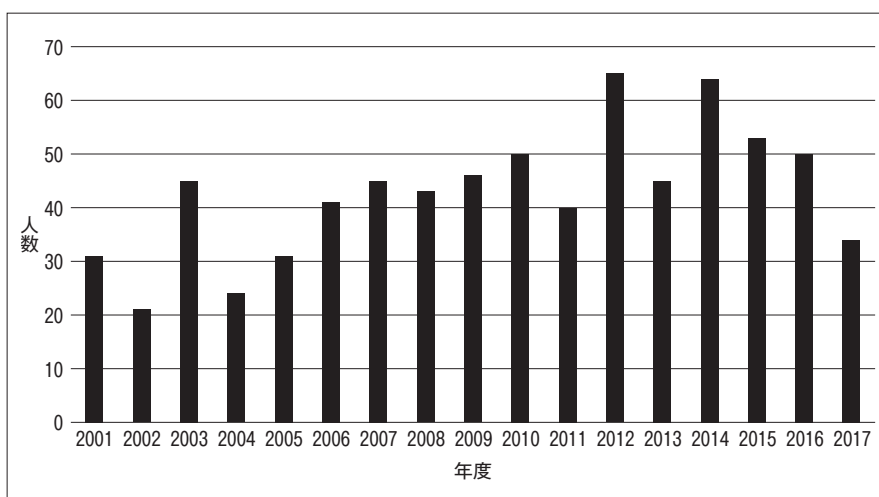


図1 特別支援学校教諭免許取得者数

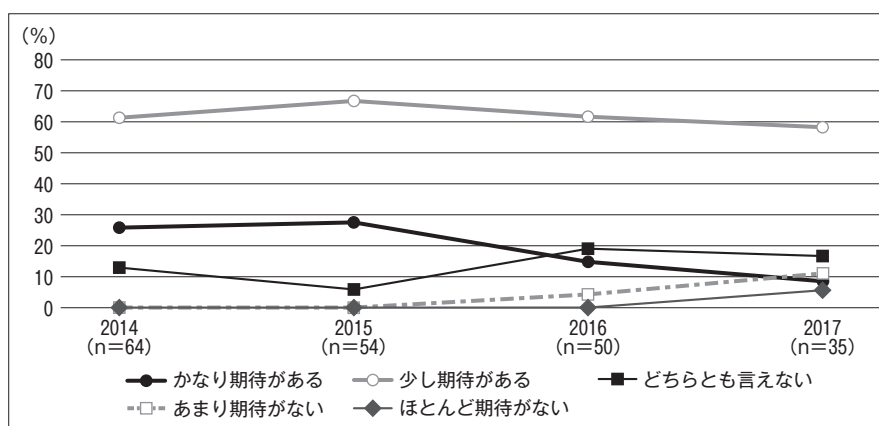


図2 実習への期待度

たな発見や学び、初めての経験」61.6%、「子どもとのコミュニケーション・活動」58.9%、「特別支援学校や障害児教育の理解」47.8%、「障害の理解や支援・介助の仕方」47.7%、であった。経年的変化では、「新たな発見や学び、初めての経験」との回答が毎年増加している。また「先輩や先生の話聞いて」と回答した学生も増加傾向にあった。一方、「障害の理解や支援・介助の仕方」に期待しているという回答数は減少傾向にあった。

この設問に関する自由記述では、「幼稚園実習や保育所実習とは全く違う体験を通して自分の成長につながると思う」「特別支援学級のボランティアに行っていたので、コミュニケーションの取り方や支援の仕方など、さらに深く長期の実習で学

びたい」などの回答があった。

③実習への不安度

実習に対する不安については、図4のとおりであった。4年間の平均では、「かなり不安がある」が58.1%、「少し不安がある」が39.7%、でほとんどの学生が不安を持っていた。経年変化を見ると、「かなり不安がある」が増加傾向、「少し不安がある」が減少傾向を示した。

④不安の主たる内容

前問で、「かなり不安がある」「少し不安がある」と答えた学生に対し、不安の理由・内容を尋ねた結果が図5である。平均値で最も多いのが「指導

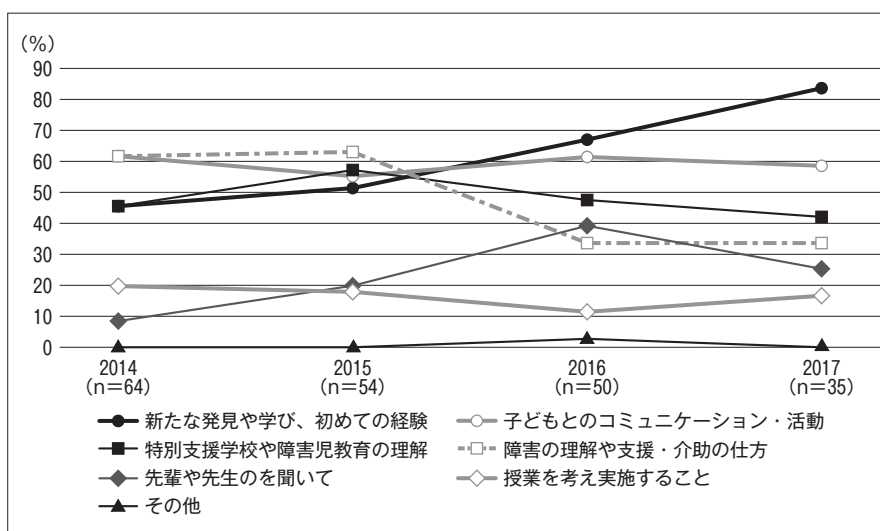


図3 期待の主たる内容

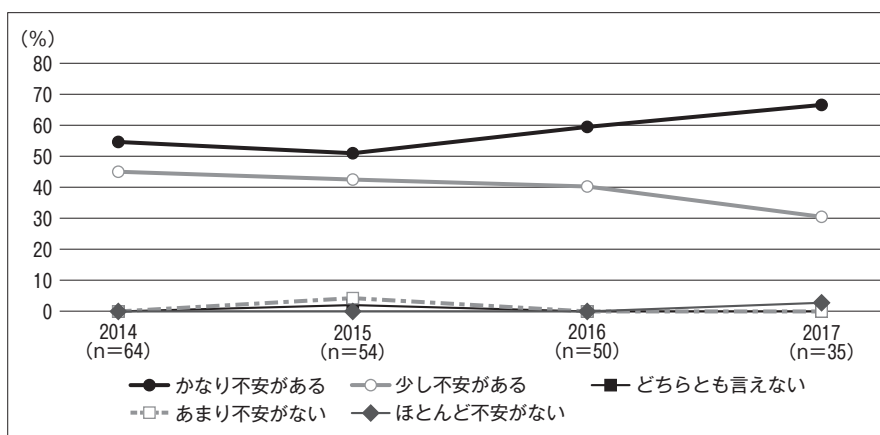


図4 実習への不安度

案作成、授業実践、研究授業」の80.2%、以下「障害や学習指導についての知識不足」66.2%、「障害のある児との対応、受け入れられるかどうか」38.8%、「就職活動や卒論等と重なりそう」38.4%、「実習校の様子、実習の内容」27.2%、であった。中でも「指導案作成、授業実践、研究授業」は増加傾向、「障害や学習指導についての知識不足」は減少傾向であった。

自由記述では「研究授業の準備が大変そう」「先輩の話聞いて、実習中に帰宅までにする作業の多さなどが指導教員によって異なることが不安」「実習の時期が就職や卒論の時期と重ならないか不安」という回答があり、今野・池田・小川(2017)

で示された内容よりも具体的な記述が多くなっている。

⑤教育実習の努力目標

実習への意欲を高めるための主体的な目標設定を質問した結果が図6である。平均値が高かったのは「子どもとの関わり・コミュニケーション・ふれあい」76.5%、「新しい知識の吸収や経験の拡大」55.1%、「障害の理解や支援・介助の仕方」53.2%、であった。経年比較では、「積極的な取り組み姿勢」「指導案作成・授業実践・研究授業」が増加傾向、「障害の理解や支援・介助の仕方」は減少傾向となった。

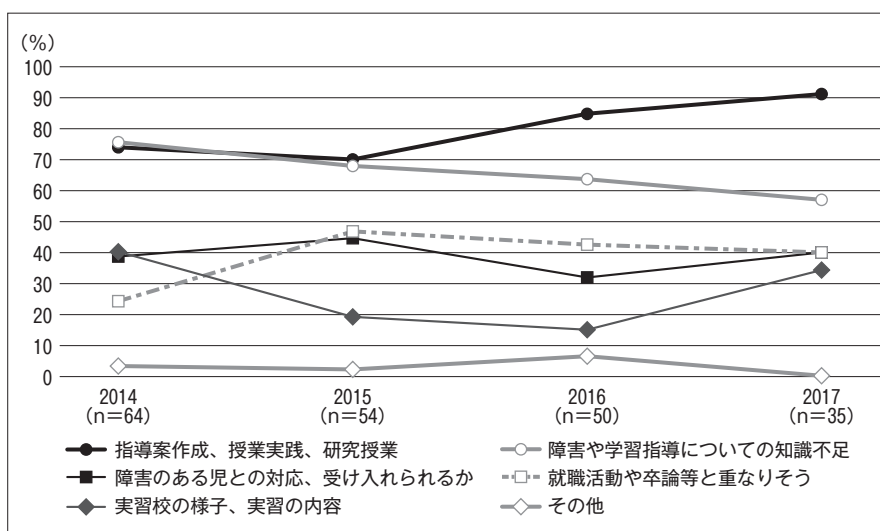


図5 不安の主たる内容

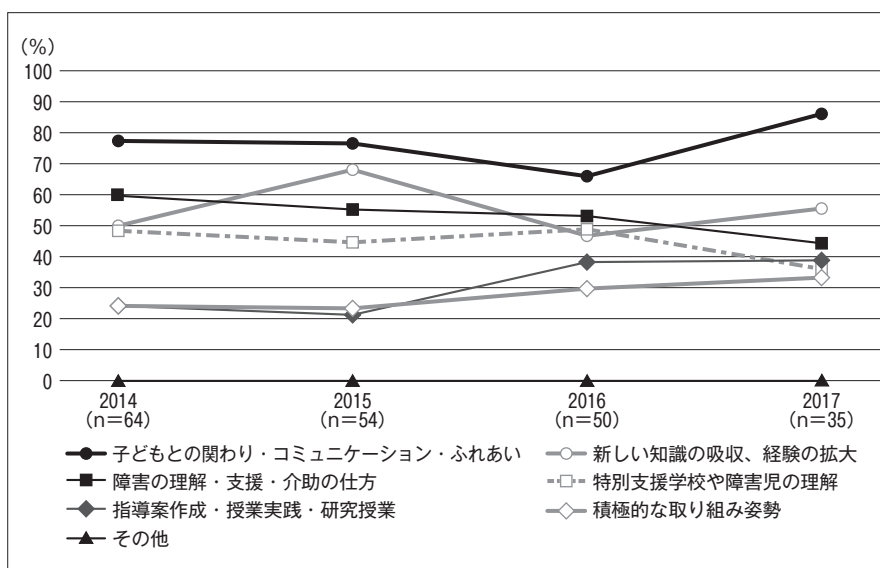


図6 教育実習の努力目標

(2) 実習後調査

⑥実習中、楽しかったこと

実習を終えた学生に「楽しかったこと」を尋ねた結果が図7である。平均値で「子どもとのコミュニケーション・ふれあい」が96.4%と最も高く、以下、「子どもとの様々な活動」64.6%、「授業づくりの工夫、子どもとの反応」48.4%、「指導教員や職員との関わり」46.3%、と続いた。経年比較では、「子どもとのコミュニケーション・ふれ

あい」を毎年ほとんどの学生が挙げていた。「障害の理解や支援、介助の仕方」はやや減少傾向が見られた。

自由記述では「基本、すべて楽しかった」「自分が授業で行った活動を、子どもたちが声を出して楽しんできて安心した」「指導教員や職員の方々がとても暖かく指導してくださった」などの回答があった。

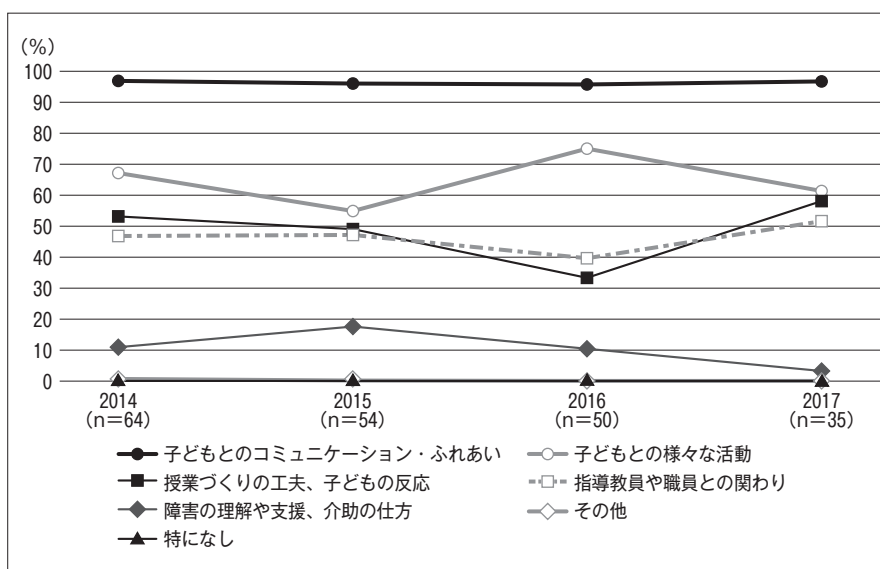


図7 実習中、楽しかったこと

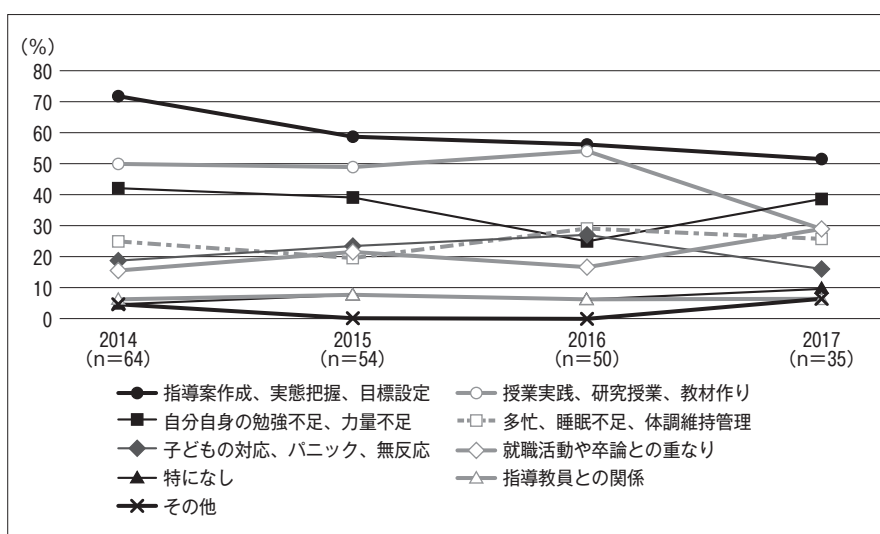


図8 実習中、辛かったこと

⑦実習中、辛かったこと

辛かったこと（図8）の平均値は、「指導案作成、実態把握、目標設定」が59.7%、「授業実践、研究授業、教材作り」45.6%、「自分自身の勉強不足、力量不足」36.3%、「多忙、睡眠不足、体調維持管理」24.9%、「子どもの対応、パニック、無反応」21.4%、「就職活動や卒論との重なり」20.7%、の順であった。

経年推移では、「指導案作成、実態把握、目標設定」「授業実践、研究授業、教材作り」で顕著な減

少傾向が見られた。

自由記述から「2週間の実習はスケジュールが詰まるので、睡眠不足が続いた」「情報機器の取り扱いに不慣れなので大変だった」などの回答があった。

⑧実習の満足度

実習前の「期待」を踏まえた、実習終了後の満足度は図9のとおりである。平均で「かなり満足した」75.3%、「少し満足した」20.6%で、計95.9%

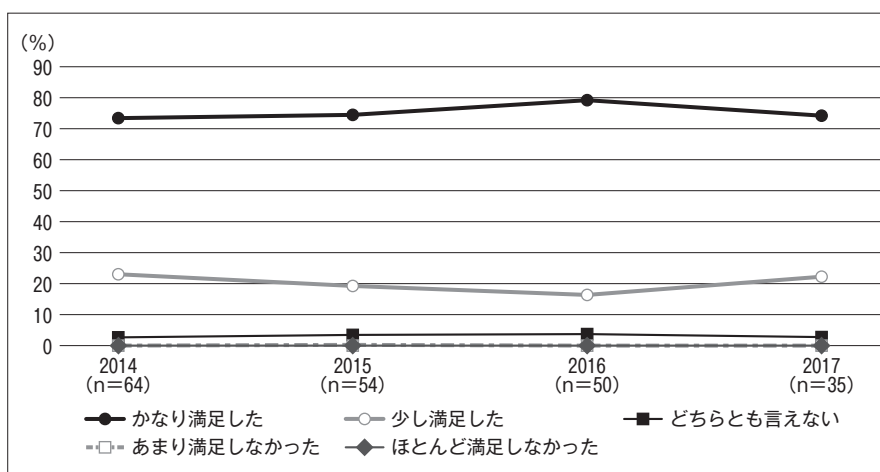


図9 実習の満足度

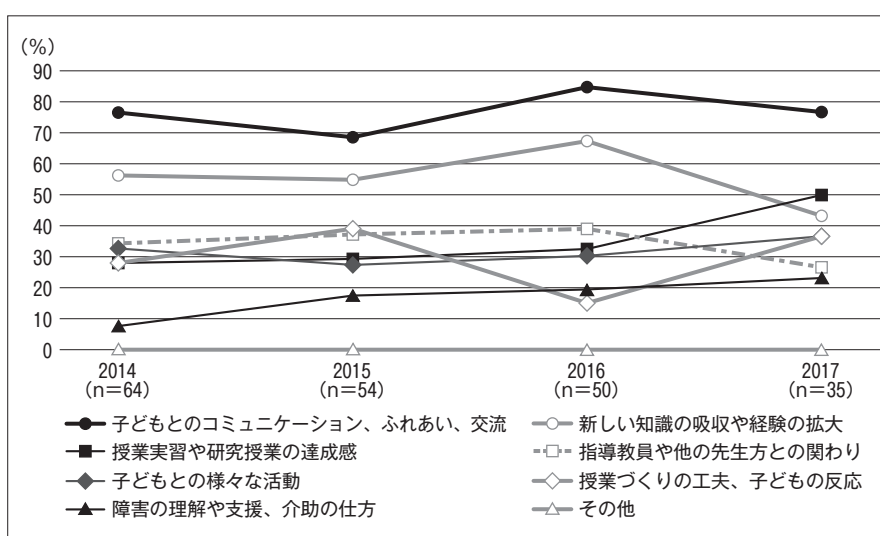


図10 満足の内容

を占めた。経年比較でも、4年間を通して、この2つの回答が94%以上であった。

⑨満足の内容

満足した理由を質問した結果が図10である。その結果、平均では「子どもとのコミュニケーションやふれあい、交流」76.7%、「新しい知識の吸収や経験の拡大」55.5%、「授業実習や研究授業の達成感」35.0%、「指導教員や他の先生方との関わり」34.4%、「子どもとの様々な活動」31.9%、「授業づくりの工夫、子どもの反応」29.8%、であった。経年比較では「授業実習や研究授業の達成感」「障

害の理解や支援、介助の仕方」の項目で、毎年増加が見られた。

⑩自分が成長したこと

実習前の「決意・抱負」「努力目標」を踏まえて、「自分が成長したと思うこと」について質問した結果が図11である。結果は「指導方法やアイデアなどを考え工夫する力」53.3%、「障害の理解、障害のある児の見方」50.2%、「指導姿勢、教育者としての意識」41.0%、「子どもとのコミュニケーションやふれあい、交流」39.2%、「実態を把握する力」36.2%、であった。経年比較では、「障害の

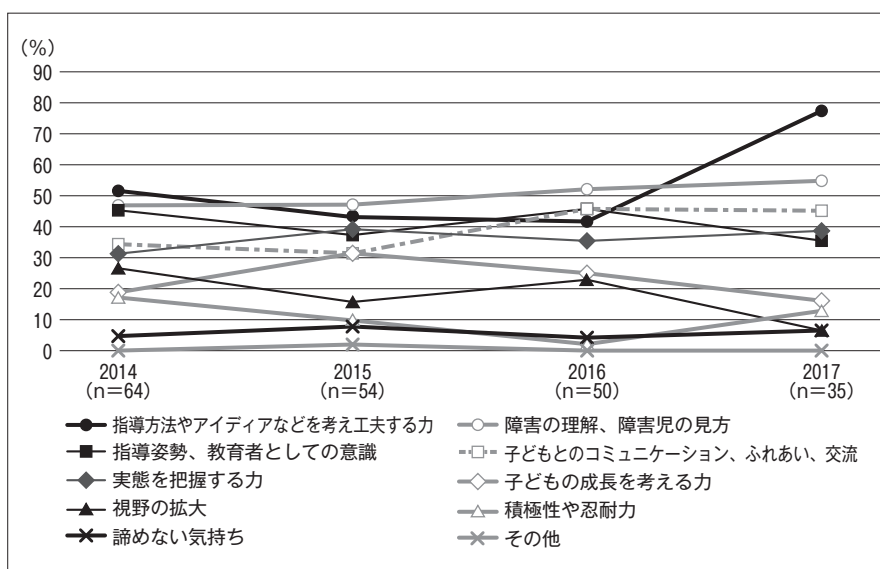


図 11 自分が成長したこと

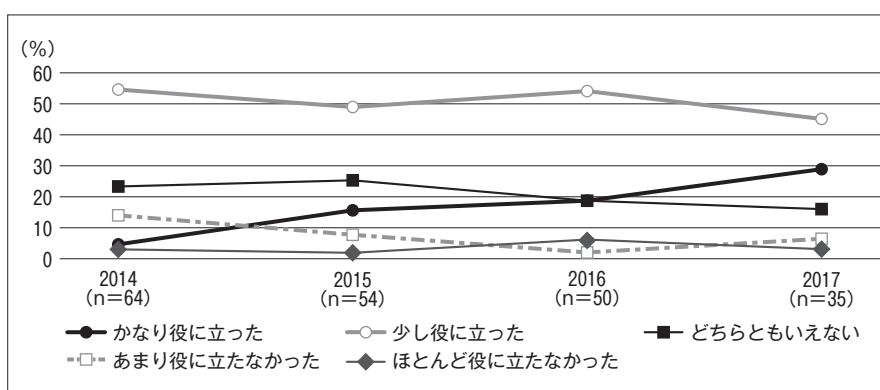


図 12 ボランティアの有効性

理解、障害のある児の見方」で毎年増加する傾向が見られた。

⑪ボランティアの有効性

教育実習を履修するにあたって課している特別支援学校等でのボランティア活動の有効性について質問したのが図 12 である。結果は「少し役に立った」が 50.8%、「どちらともいえない」20.9%、「かなり役に立った」17.1%、「あまり役に立たなかった」7.6%、「ほとんど役に立たなかった」3.7%であった。経年変化では、「かなり役に立った」が、2014 年度の 4.7%から毎年増加し 29.0%まで上昇している。

⑫ボランティアが役に立った理由

ボランティアが「かなり役に立った」「少し役に立った」と考える回答者が挙げた理由は、「障害のある子どもと関わる経験ができた」が 58.3%、以下「障害のある子どもの理解や接し方を知ることができた」44.2%、「特別支援教育のイメージづくりができた」38.9%、「特別支援学校の教職員や雰囲気を知ることができた」31.0%であった。経年比較では、「障害のある子どもと関わる経験ができた」が 2014 年の 37.5%から 2017 年の 69.6%、「障害のある子どもの理解や接し方を知ることができた」が同じく 21.9%から 65.2%と、大幅に増加していた。

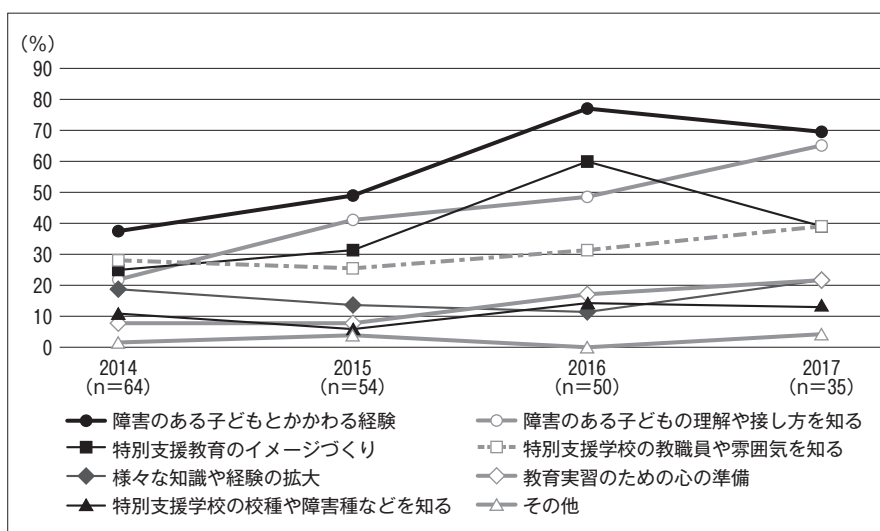


図 13 ボランティアが役に立った理由

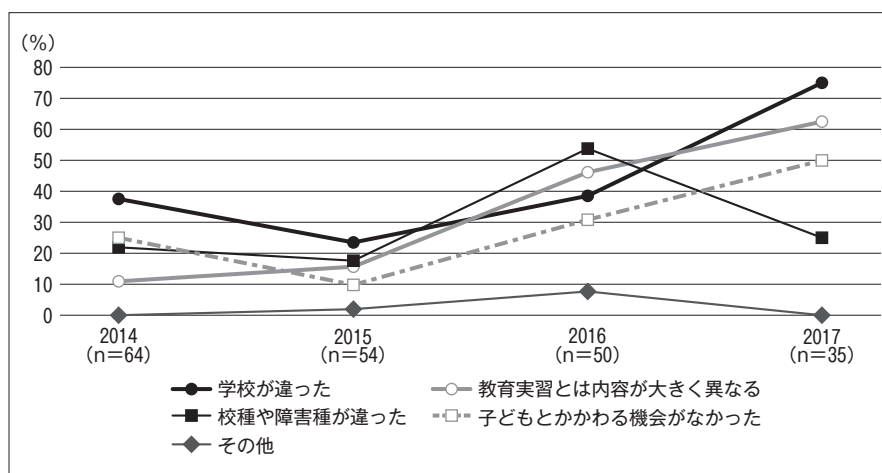


図 14 ボランティアが役に立たなかった理由

⑬ボランティアが役に立たなかった理由

一方、ボランティアが役に立たなかったと考える回答者が挙げた理由は、「ボランティアに行った学校と違う学校だった」43.6%、「ボランティアと教育実習では内容が大きく異なる」33.8%、「ボランティアに行った学校と、校種や障害種が違った」29.6%、「行事等の手伝いが主で子どもと関わる機会がなかった」28.9%、という順であった。

⑭実習校への要望

実習校、指導教員についての要望については、「お忙しい中、丁寧に指導していただきました」などの感想のほか、「資料を持ち帰ることが許可さ

れておらず、自宅で作業ができない分、負担が大きかった」というコメントもあった。

⑮大学への要望

大学での事前指導について、要望を自由記述で求めたところ、学習指導案の書き方、授業の進め方、実習日誌の書き方について、もっと時間をとって詳しく指導することを望む意見が多かった。また「中学生、高校生との関わり方について知りたい」「実習校での情報管理がかなり厳しいので、これに関連した指導をしてほしい」といった要望もあった。

⑯後輩に伝えたいこと

「次年度に特別支援教育実習の履修を希望している後輩に伝えたいこと」について、自由記述で回答を求めた。このうち事前指導に関連する回答の一部を抜粋する。

「自分の行く実習校の概要や児童生徒の障害について、事前に知識を深めておくべき」「自分が実習する学校の子どもたちについて、もう一度その分野の授業のプリントを復習するとよい」「指導案の形式が、幼稚園・保育所と異なる。児童生徒一人ひとりの実態を把握することが重要」「学習指導案の様式・書き方について事前に準備をすることが重要」「特別支援のボランティアに参加し、たくさんの学校を見ておくと、実習準備に役立つ」「ボランティアでも学校行事の道具係など、子どもとあまり関わらないものではなく、授業に参加できるなど子どもたちとたくさん関われるものは役に立つ」

5 考察

考察では、以上の結果のうち特徴的な傾向があった項目について述べる。

実習への期待度と期待の内容については、「新たな発見や学び、初めての経験」に期待するとの回答が毎年顕著に増加しており、「先輩や先生の話を聞いて」期待を持っていると回答した学生も増加傾向にあった。これは特別支援教育実習に向かう学生の主体性が育っていること、またこれまでの調査結果を活用して実習生の声を取り入れた事前指導の充実を図ってきた成果と考えられる。

一方、実習への不安とその内容に着目すると、「かなり不安がある」が増加傾向にあった。また「指導案作成、授業実践、研究授業」は年々増加傾向にあるが、「障害や学習指導についての知識不足」は減少傾向にあることから、事前指導で多くの知識を得ることにより、不安の内容は漠然としたものではなく研究授業に向けての学習指導案作成などの準備の内容、仕事量など具体的なものになってきたことが推測される。

実習を終えて、楽しかったことに関しては、毎年ほぼ全員が「子どもとのコミュニケーション・ふれあい」を挙げていた。辛かったことは「指導案作成、実態把握、目標設定」「授業実践、研究授業、教材作り」が全体の中では高率を示していた

が、経年推移では顕著な減少傾向が見られた。これは、学習指導案の作成、研究授業の実施が、実習生にとって最大の難関であることに変わりはないが、事前指導でこれに関する指導を継続・拡大してきたことにより、これらを「辛い」と感じる実習生の割合は減ってきていると考えられる。

実習の満足度とその内容、自分が成長したことについての項目に目を向けると、満足の内容では「楽しかったこと」と同様に、「子どもとのコミュニケーション、ふれあい」が毎年もっとも高い値を示していた。「満足の内容」と「自分が成長したこと」では、「障害の理解」についての項目が毎年わずかずつ上昇していることが特徴的であり、学校現場での実習を通して障害および障害のある子どもについての理解や接し方を学んだことへの達成感・充実感が得られたことが推察された。

ボランティアの有効性では、「かなり役に立った」が、4.7%から4年間毎年増加し29.0%まで上昇しているのが特徴である。その内容については「障害のある子どもと関わる経験ができた」と「障害のある子どもの理解や接し方を知ることができた」が大幅に増加していた。

実習校に関しては「資料を持ち帰ることが許可されていない」とのコメントがあったが、これは守秘義務の観点からの指導が必要となる。

大学での事前指導についての要望では、学習指導案の書き方、授業の進め方、実習日誌の書き方について、現在よりも多くの指導を望む意見があった。任意の記述項目のため経年的比較はできないが、毎年多数の要望が挙がる項目である。さらなる指導の改善・充実が必要であろう。具体的には、4年次に行われる特別支援学校教育実習に向けて、下学年から意識を高めるよう日常的に特別支援教育についての情報を発信し、特別支援学校教育実習にスムーズにつなげられるようにすることが考えられる。また、実習校は3年次に希望調査を実施し連絡協議会での調整を経て決定するが、実習校が決まり次第、本学科と実習校の間で連携をさらに充実させて、2～3週間という短期間の実習をより有意義なものにすることも必要であろう。

後輩に伝えたいことについては、教育実習事前指導において受け身ではなく学生が主体的に取り組む必要性が述べられていた。また、ボランティアについては前述したが、ここでもその有用性と

留意事項が語られている。本学科では、2014 年度から近隣の小中学校の協力を仰ぎ、特別支援学級でのボランティア活動を行っている。これは、週 1 回、1 日 3 時間程度を使って特別支援学級の授業や活動に参加し、児童生徒の学習の補助や休み時間の遊び相手などをするものである。これを一人平均 7～8 回、多い学生では 10 回以上継続して行うため、児童生徒との関係も深まり、また様々な状況に応じた教員の指導の様子も観察することができる。あくまでも希望者が参加するボランティア活動であるが、ボランティアの有用性に関する回答や自由記述からは、この特別支援学級でのボランティア活動に参加した学生からのボランティアの意義が強調されていると考えられる。

ところで、特別支援学校教育実習について、実習生へのアンケート調査に基づいて大学の教育課程、事前指導・事後指導などの教育内容の改善・充実を図ろうとする試みは以前から見られる（是枝ら；2007、小方ら；2009、當島；2013、亀田ら；2013 など）。また近年は、実習後の事後指導等における学生の自己評価を活用する試みも見られる。

庭野（2017）は、教育実習前の学生にアンケートを行い、授業の実践方法の不安に対する対応として模擬授業を繰り返し実施する、学習指導案の書き方に対する不安については 3 年次で添削指導を行い 4 年次でも再度指導する、専門知識の不足に対する不安については専門科目の復習の徹底を指導する、障害児とのかかわりに不安を持つ学生にはボランティア活動への参加や特別支援学校の見学を勧めるなどの指導を行っている。特に大学附属の特別支援学校がないという条件に鑑み、ボランティアや見学の受け入れを依頼する取り組みにより、実習前の学生の不安がかなり軽減できたと述べている。

中村ら（2018）はアンケート調査ではないが、実習生が特別支援学校での教育実習終了後に提出した実習報告書での自己評価項目を分析した。その結果、「実習で困難を感じたこと」として、実態把握、コミュニケーション、「実習を行う上で前もって学んでおきたかったこと」として、実態把握、指導案の書き方、授業法等を多くの学生が挙げていた。これに対し、実習指導の内容の改善点として、事前指導では、障害種別ごとの実態把握の観点、実態を踏まえた模擬授業、自立活動、合わせた指導、指導案作成など、実習現場で実際の

に求められる「教育的内容」「指導法」で構成されることが望まれ、事後指導では、客観的データに基づく実態把握、障害の種別に応じた個別支援と集団支援、児童生徒の生涯を見据えた社会的支援について深化した学びが必要であると述べている。

吉川（2016）は、実習後の事後指導における学生の自己評価を、成績評価との比較も含めて分析した。その結果、ほとんどの実習生が「児童・生徒理解」の事項について、特別支援教育実習で期待した学びをすることができたと評価していると考えられた。また学びのさらなる向上を目指すための検討事項として、近接の趣旨・目的を持った授業である教職実践演習を有効活用すること、教育実習を依頼する段階から実習開始時期までの間に、実習校の実情に応じた専門科目の履修を優先的に行うことなどを挙げている。

本学科での特別支援教育実習指導とこれらの研究には共通する成果や異なる課題が見られる。

共通する成果としては、事前のボランティア活動の活用、学習指導案作成に関する指導の充実、その結果として実習に対する不安が軽減され、実習後の満足感・達成感が得られていることである。特にボランティア活動については、「特別支援学級のボランティアに行っていたので、コミュニケーションの取り方や支援の仕方など、さらに深く長期の実習で学びたい」という記述に代表されるように、実習生の主体的な学びの姿勢につながっており、さらに計画的な活用が望まれる。

しかし本学科の課題として、現在の教育課程では事前指導に十分な時間を取ることができず、模擬授業や実習校に対応した詳細な指導を行うまでには至っていないことが挙げられる。またこの時間不足を補うための教育実践演習科目との連携を図る試みもなされていない。さらに自由記述にも見られるように、今後は児童生徒の個人情報管理に関する事項、情報機器の取り扱いに関する事項の指導も必要となるため、現状では事前指導の時間が不足することが考えられる。

この課題に対する改善策としては、今回の意識調査から得られた知見を、事前指導や「実習の手引き」等を通して学生に具体的にフィードバックし、学生のさらなる主体的な学びを促すことも有効な方法であろう。

本学科では、将来的に特別支援教育実習指導として指導時間を明確に位置づけ、講義として設定

する予定であることから、以上の成果と課題を踏まえて、今後の事前指導・事後指導の充実を図っていきたい。

文献

- 池田浩明・小川透・武石詔吾 (2011)「特別支援学校の教育実習における学生の意識について(1)——実習生の期待・不安・成長に関するアンケート調査から——」藤女子大学紀要第Ⅱ部第48号, 125-131.
- 池田浩明・小川透・武石詔吾 (2012)「特別支援学校における教育実習改善の基礎的研究(1)——教育実習担当指導教員へのアンケート調査から——」藤女子大学紀要第Ⅱ部第49号, 85-89.
- 池田浩明・小川透・武石詔吾 (2013)「特別支援学校における教育実習改善の基礎的研究(2)——教育実習担当指導教員へのアンケート調査から——」藤女子大学人間生活学部紀要第50号, 89-93.
- 池田浩明・小川透・武石詔吾 (2013)「特別支援学校の教育実習における学生の意識について(2)——期待・不安及び意見・要望に関するアンケート調査から——」藤女子大学人間生活学部紀要第50号, 95-102.
- 亀田隼人・松本直己・蓮香美園・山本由佳・奥住秀之 (2013)「教育実習の充実に向けた取り組み」東京学芸大学附属特別支援学校研究紀要 57, 123-126.
- 今野邦彦・池田浩明・小川透 (2016)「特別支援学校における教育実習改善の基礎的研究(3)——教育実習担当指導教員へのアンケート調査から——」藤女子大学人間生活学部紀要第53号, 73-80.
- 今野邦彦・池田浩明・小川透 (2017)「特別支援学校の教育実習における学生の意識について(3)——教育実習生へのアンケート調査から——」藤女子大学人間生活学部紀要第54号, 97-103.
- 今野邦彦・池田浩明・小川透 (2018)「特別支援学校における教育実習改善の基礎的研究(4)——文章記述からみた課題の分析——」藤女子大学人間生活学部紀要第55号, 95-100.
- 是枝喜代治・上田征三 (2007)「社会福祉系大学における特別支援学校教員養成の教育的意義について——教育実習生によるアンケート調査から——」日米高齢者保健福祉学会誌第2号, 307-315.
- 中村明美・高井弘弥・橋詰和也・宇野里砂 (2018)「特別支援学校教育実習指導の提言と展望」武庫川女子大学学校教育センター年報(3), 23-32.
- 庭野賀津子 (2017)「特別支援学校教育実習事前指導の取組み」教師教育研究 (30), 23-29.
- 小方朋子・木下博美 (2009)「教育実習改善のための取組とその展望——教育実習及び事前事後カリキュラムの開発——」香川大学教育実践総合研究 19, 65-70.
- 當島茂登 (2013)「特別支援教育推進のために大学は何かできるか」Synapse Vol.27, 41-43.
- 吉川明守 (2016)「特別支援学校教育実習における学生の学びの現状と課題——事後指導における自己評価と実習校教員による成績評価からの検討——」教職支援センター紀要 8, 1-21.

資料 1

障害児教育実習の履修を予定する学生の意識調査

調 査 1 「実 習 前」

問 1－1 実習前の「期待」に関して、いずれか一つに○印を付けてください。

① () かなり期待がある	④ () あまり期待がない
② () 少し期待がある	⑤ () ほとんど期待がない
③ () どちらとも言えない	

問 1－2－1 上記①②を選んだ場合は、その理由として、該当する項目を三つ以内で選んでください。

- A 子供とのコミュニケーションや様々な活動
- B 障害の理解や支援・介助の仕方
- C 特別支援学校や障害児教育の理解
- D 授業を考え実施すること
- E 新たな発見や学び、初めての経験
- F 先輩や先生の話聞いて
- G その他 ()

問 1－2－2 上記③④⑤を選んだ場合は、その理由を具体的に書いてください。
()

問 2－1 実習前の「不安」に関して、いずれか一つに○印を付けてください。

① () かなり不安がある	④ () あまり不安がない
② () 少し不安がある	⑤ () ほとんど不安がない
③ () どちらとも言えない	

問 2－2－1 上記①②を選んだ場合は、その理由として、該当する項目を三つ以内で選んでください。

- A 障害児との対応、受入れられるか
- B 実習校の様子や実習の内容が良く分からない
- C 障害や学習指導についての知識が不足
- D 指導案の作成や授業実践、研究授業
- E 就職活動や卒業論文等と重なりそう
- F その他 ()

問 2－2－2 上記③④⑤を選んだ場合は、その理由を具体的に書いてください。
()

問 3 教育実習での自分の努力目標について、該当する項目を三つ以内で選んでください。

- A 子供との関わり、コミュニケーションやふれあい
- B 障害の理解や支援・介助の仕方
- C 特別支援学校や障害児教育の理解
- D 指導案の作成や授業実践、研究授業
- E 新しい知識の吸収や経験の拡大
- F 積極的な取り組み姿勢
- G その他 ()

資料 2

障害児教育実習を履修した学生の意識調査

「実習中」

問 1 「楽しかったこと」について、該当する項目を三つ以内で選んでください。

- A 特にありません B 子どもとのコミュニケーションやふれあい
C 子どもとの様々な活動 D 障害の理解や支援、介助の仕方
E 授業づくりの工夫、子供の反応 F 指導教員や職員との関わり
G その他 ()

* 特筆すべき事柄があれば具体的に書いてください。

()

問 2 「辛かったこと、困ったこと」について、該当する項目を三つ以内で選んでください。

- A 特にありません B 子どもの対応、パニックや暴力、無反応など
C 指導案の作成、実態把握や目標の設定など D 授業実践、研究授業、教材作り
E 指導教員との関係 F 自分自身の勉強不足や力量不足
G 多忙、睡眠不足、体調の維持管理など H 就職活動や卒業論文等との重なり
I その他 ()

* 特筆すべき事柄があれば具体的に書いてください。

()

「実習後」

問 1-1 実習前の「期待」を踏まえ、実習を終えての「満足度」についてお聞きします。

いずれか一つに○印を付けてください。

① () かなり満足した	② () 少し満足した	③ () どちらとも言えない
④ () あまり満足しなかった	⑤ () ほとんど満足しなかった	

問 1-2-1 上記①②を選んだ場合は、その理由として、該当する項目を三つ以内で選んでください。

- A 子どもとのコミュニケーションやふれあい、交流 B 子どもとの様々な活動
C 障害の理解や支援、介助の仕方 D 授業づくりの工夫、子どもの反応
E 授業実習や研究授業の達成感 F 新しい知識の吸収や経験の拡大
G 指導教員や他の先生方との関わり
H その他 ()

問 1-2-2 上記③④⑤を選んだ場合は、その理由を具体的に書いてください。

()

問 2 実習前の「決意・抱負」「努力目標」を踏まえ、自分が成長したと思うことについて、該当する項目を三つ以内で選んでください。

- A 子どもとのコミュニケーションやふれあい、交流 B 障害の理解、障害児の見方
C 指導姿勢、教育者としての意識 D 実態を把握をする力
E 指導方法やアイデアなどを考え工夫する力 F 子どもの成長を考える力
G 視野の拡大 H 積極性や忍耐力 I 諦めない気持ち
J その他 ()

問3 実習校・指導教員等への意見・要望があれば、具体的に書いてください。(自由記述)

[]

問4 教育実習に対する大学での事前指導・各種講義・演習等について意見・要望があれば、具体的に書いてください。(自由記述)

[]

問5-1 教育実習に際して、特別支援学校等へのボランティアを課していますが、そのことについて、いずれか一つに○印を付けてください。

① () かなり役に立った	② () 少し役に立った	③ () どちらとも言えない
④ () あまり役に立たなかった	⑤ () ほとんど役に立たなかった	

問5-2-1 上記①②を選んだ場合は、その理由として、該当する項目を三つ以内で選んでください。

- A 障害のある子どもと関わる経験
- B 障害のある子どもの理解や接し方を知る
- C 特別支援教育のイメージづくり
- D 特別支援学校の校種や障害種などを知る
- E 特別支援学校の教職員や雰囲気を知る
- F 様々な知識や経験の拡大
- G 教育実習のための心の準備
- H その他 ()

問5-2-2 上記③④⑤を選んだ場合は、その理由として、該当する項目を三つ以内で選んでください。

- A ボランティアに行った学校と実習校が違った
- B ボランティアに行った学校と校種や障害種が違った
- C 行事等の手伝いが主で子どもと関わる機会がなかった
- D ボランティアと教育実習では内容が大きく異なる
- E その他 ()

問6 教育実習全般を振り返り、特に後輩に伝えたいと思うことがあれば、具体的に書いてください。(自由記述)

[]

